

### 戦争と個の時間

#### ——マームとジプシー「Cocoon」を観て

中谷 いずみ

昨年九月、沖縄戦を描いた舞台「Cocoon」（マームとジプシー）を観た。チケットを入手していた上演がコロナでキャンセルとなり、慌てて別日を取り直すなどのアクシデントはあったが、二〇一三年の初演、二〇一五年の再演は観られなかったもので、（演出は変われど）ようやく念願がかなったといえる。同年春に、やはり同団体が沖縄を描いた「Light House」を観たのだが、その際、舞台上で繰り広げられた水をめぐる語り、村上陽子さんの『出来事の残響』（インパクト出版会、二〇一五年）や新城郁夫さんの『沖縄に連なる』（岩波書店、二〇一八年）の記憶が不意に呼び起こされる瞬間があった。眼前で展開する舞台の時間と個人的な読書の記憶とが呼応し、イメージが幾重にも重なり広がるという興味深い体験をしたのだが、この時間感覚の交錯は観劇の一つの醍醐味だと思ふ。

マームとジプシーの作・演出を担う藤田貴大は、同じ台詞や場面を劇中に何度も出現させる「リフレイン」という手法をとる。その効果について藤田は、「頭の中に生まれた余白で、観客は例えば自分の記憶や原風景と、舞台を照らし合わせたり、語られている以上の登場人物の関係性を考えたり」と述べている（藤田貴大インタビュー）。「喪失と獲得をリフレインして、もつと遠くへ——マームとジプシーの旅の軌跡」『ユ

リイカ』二〇一三年一月号）。これを踏まえれば、前述の私の体験はまさに演出家の狙い通りといえるだろう。

たださらに興味深いのは、この「リフレイン」の方法が、歴史上の戦禍における個の物語でよりいっそうの効果を生むということだ。例えば「Cocoon」では、沖縄戦に動員された女学生たちの発話や行為が断片化され、反復される。これは情勢について俯瞰的視点を持たず、また出来事の通時的展開を知るはずもない彼女たちが、日常を破壊され、ひたすら今という時間を駆け抜けるしかなかったことを、そしてその疾走のさなかで唐突な生の途絶に襲われ続けたことを、表現によって伝えるものでもある。「リフレイン」は、歴史上の暴力にさらされた彼女たちの刹那を舞台上に氾濫させ、乱反射させる。観客は、断片化された時間を紡ぐ余地もないまま、生の時間の氾濫に立ち会うしかないのである。

こうして作品は、戦禍における個の存在を観客の胸に刻み込む。なお、同じ手法を用いて戦禍を寓話的に描いた「BOAT」（マームとジプシー、二〇一八年）の最後は、次の台詞で締められている。

物語が終わったその瞬間、私は、私たちは、まぶたを開ける。そこに何が見えるか。もうたった一度しか言わない。繰り返さない。これは祈りなんかじゃない。そこに何が見えるか。未来は、あるか。

祈りに託すことなく、まぶたを開くこと。文学や文化を対象とする研究は、物語が終わった後の現実のなかで、作品を見せてくれたものを問い続けねばならないのだろう。二〇二三年の今、そのことを強く思う。

## 第六十七回 原爆文学研究会報告

二〇二二年一月四日(日)第六十七回研究会を開催しました。前回  
は対面とオンラインのハイブリッド形式での開催でしたが、今回はオン  
ライン会議システムを利用し、オンラインのみでの開催としました。今  
後は状況を見つつ、ハイブリッド形式とオンラインでの開催を交互に行  
う予定です。また、今回の開催は十二月の第一週とし、第一期からの懸  
念事項であったクリスマスとのバッティングを避けました。合わせてお  
知らせいたします。

研究会は相川美恵子さんによる研究発表「中澤晶子『ワタシゴト 14  
歳のひろしま』を読む〈アナタ〉から〈ワタシ〉へ」と、中野和典さ  
ん、遠田憲成さんを発題者に再読企画「『原爆文学』再読9―原民喜「夏  
の花」」を行いました。

相川美恵子さんの研究発表では、東日本大震災以降の二〇二〇年に刊  
行された中澤晶子『ワタシゴト 14歳のひろしま』(汐文社)の丹念な  
読解から、被爆の経験のない世代が、どのようにして被爆の記憶と出会  
い、それを継承してゆくのかの方策が検討されました。東日本大震災で  
被災した少女と被爆者のおばあさんとの出会いが描かれる「ごめんな  
さー」が、個別的な記憶の継承の可能性が示されるものであると同時に、  
被爆の記憶の女性化の系譜に回収されるものではないかという示唆がな  
されました。会場参加者からは、中澤の他作品における記憶の取り扱  
いについての質問などが寄せられました。

後半の再読企画では、原民喜「夏の花」を取り上げました。中野さん  
からは、題名や表記、構成といった多岐にわたる視点から「夏の花」の  
受容史に関する発表がなされました。遠田憲成さんの発表では『小説集  
夏の花』の中で、原が「夏の花」との対応を意図したと思われる「氷花」  
との比較・検討が行われました。二作品における「墓参」の類似性と相  
違点から、原の死者を弔うための準備についての示唆がなされました。

### ◇研究発表

中澤晶子『ワタシゴト 14歳のひろしま』を読む

〈アナタ〉から〈ワタシ〉へ

相川 美恵子

以下は、「中澤晶子『ワタシゴト 14歳のひろしま』を読む〈アナ  
タ〉から〈ワタシ〉へ」と題して行った発表の報告です。

冒頭に中澤晶子の著作リストを提示して、中澤作品の概要を紹介した  
のち、発表に移りました。発表者が本作に注目したことの第一は、収録  
された五つの短編の配列です。一作ごとにあの日が現在に向かって近  
づいてくるように仕掛けられています。これはあの日と現在の間にあ  
る、単に時間だけではない遠さの感覚を呼び起こさせるものです。また、  
第二は、本作で提示されている記憶の伝え方についてです。個人が、他  
でもないその遺品とだけ、ある必然性をもって濃密に向き合うという形  
で行われる記憶の受け渡しの形が、本作には登場します。このような受  
け渡しはそれ自体は極めて閉じていて、受け渡された記憶が共有される  
ことはありません。しかし受け取った個人のなかでは、どのようにか形  
を変えつつ育っていく可能性もあります。こうした記憶の受け渡しを描  
かれたことに注目しました。

発表後に次のようなご質問やご指摘をいただくことができました。順  
に記します。また、応答できるものは↓の下に示しました。

- ① 中澤作品が纏う 国産児童文学離れした風合いや、原爆のみならず  
原発へも寄せ続けている高い関心はどこから来るのか知りたい。作  
家論的な補筆をしてほしい。

② アーサー・ビナードの絵本『さがしています』（写真・岡倉禎志、童心社、二〇一二）の中に遺品のワンピースが出てくるが、それとの関係は？ ↓後日、本人に訊いたところ、「あの絵本と比べられるの、すごくいや！」とのことでした。

③ 「いし」の解釈について。↓発表者の解釈は、解釈の範疇を超えて誤読でした。ご指摘に深く感謝申し上げますとともに、皆様にお詫びいたします。

④ 結局、本作は「模範的な作品」というところに落ち着いてしまうのではないか。↓ご指摘の通り、本作は、これを「学校物語」として読むならば、直ちに理想的な、あるいは余りに出来すぎたツマラナイ物語に反転してしまう。そのことは了解しています。ただ、発表者はそのような読み方をすることでこぼれてしまう可能性もあるのではないかと考えました。平和は大切だ、原爆反対、というスローガンに回収されないような記憶の繋ぎ方というものがあるならば、それは例えば、個別に密に行われる〈アナタ〉から〈ワタシ〉への記憶の受け渡しというケースの中にはないかと思うのです。

以上です。もしかしたら取りこぼしたご意見があるかもしれません。その場合はどうかお許しください。いただいたご意見のすべてに心から感謝申し上げます。

最後に。「正義」と「感動」は子どもの本にとって常に取り扱い注意、この問題はこれからも考えていきたいと思えます。

## ◇「原爆文学」再読⑨——原民喜「夏の花」

### 報告①『夏の花』はどのように読まれてきたか？

中野 和典

原民喜『夏の花』を読みなおすために、この作品がこれまでどのように読み継がれてきたかを（一）短篇「夏の花」、（二）「夏の花」三部作（「夏の花」「廃墟から」「壊滅の序曲」）、（三）『小説集 夏の花』という三つの視点から整理した。

短篇「夏の花」については、死者（妻と父母、さらには被爆死者）への献花から原爆そのものまでという「題名」の多義性、出来事の忠実な記録からそれに留まらない小説までという「記録／虚構」の重層性、非日常的な言葉の使用による被爆後の世界の表象からその表象不可能性までという「片仮名詩」の機能の多様性、被害の大きさを示すための視点の変化から物語の破壊までという「構成」の働きの複数性などが指摘されてきた。

「夏の花」三部作については、「夏の花」の冒頭部と「壊滅の序曲」の末尾が円環的な時間構造になっていることを指摘した江種満子論と、この三部作の配列が一九六〇年代半ばから七〇年代前半にかけて刊行された書籍においては〈歴史的時間に沿った配列〉に変えられたことに注目し、それを根拠の一つとして〈加害者としての過去を忘却する〉あるいはそれを引き受けるとしても〈ヒロシマ〉を〈日本人〉の体験に切り詰めようとするという〈ナショナルな欲望〉にもとづいて「原爆文学」が正典化されたことを指摘した川口隆行論を主に取り上げた。

『小説集 夏の花』については、〈「陸軍用達商」として発展してきた〉原民喜の生家をモデルとする「昔の店」に描かれる〈長押にある父の肖像〉と「夏の花」に描かれる〈長押から墜落した額〉との照応関係に注目し、さらに「昔の店」の結末部に描かれる〈君は一体誰のお蔭で

今日まで生きて来たのかね）〈誰って、僕を養ってくれたのは無論親父さ〉（うん、親父だらう、その親父の商売は、あれは君が一番きらひな軍人を相手の商売ぢやないかね）というやりとりにも注目してこの小説集を（原子爆弾を被害者の一人という立場で捉えるだけにとどまらず、原爆を落としたのは実は自分ではないのかという痛切な認識に裏打ちされた書物）であると解釈した野中潤論を主に取り上げた。

最後に今回の整理から見えてくる課題を「片仮名詩」「引用」「加害性」「植民地主義と性役割」「教材論」という五つの視点から挙げた。

## 報告②原民喜「夏の花」の作品名について

### —「氷花」との比較から—

遠田 憲成

「夏の花」（『三田文学』第二十一巻二号、一九四七年六月）は、当初「原子爆弾」という作品名で、原に『近代文学』への寄稿を依頼した佐々木基一のもとへ送られている。しかし、当時GHQが行っていた検閲が懸念され、『近代文学』にて作品を掲載することは困難であった。このことを佐々木から聞かされた原は、「『原子爆弾』という題名がいけないなら『ある記録』ぐらいの題にしてはどうでしょうか、それともまだ適切な題があればそちらでつけてください」と佐々木に伝えているが、その後しばらくして、純文芸誌のため比較的検閲が緩やかであった『三田文学』に「夏の花」と作品名を変更され、更に一部描写を削除した上で「夏の花」は掲載された（佐々木基一「解説」『小説集 夏の花』岩波書店、一九八八年六月より）。

以上のような発表過程を持ち、最終的な作品名の決定を原自身が行ったのかどうかも定かではない「夏の花」であるが、その作品名がどのよ

うな意味を持ち得るのか、本報告では「氷花」（『文学会議』第三集、一九四七年一二月）との比較を行うことで考察した。

二作品の比較であるが、それぞれに描かれた「墓参」について注目した。「夏の花」における「墓参」では（夏の花）が献花されるだけでなく、妻や父母がその墓にいと描写されており、代々受け継がれるという性質を持つ墓から、「家」への意識を見ることが出来る。一方「氷花」ではそのような面は見られず、墓そのものすら描写されない。

死者を弔うという行為自体は二作品からも確認できるものの、その描写内容は異なっている。これは、墓に入ることすらできなかった無数の死者の存在を目の当たりした原の、原爆投下以前と以後での考え方の変化をあらわすものにならないだろうか。原爆以前だった「墓参」では、墓の下にいる家族しか弔うことができない。無数の死者を弔うためにはどのようにすれば良いのか、弔うという行為自体を原が考え直しているという過程を二作品からは見ることが出来る。

「氷花」という言葉は、水が花のように結晶することや、樹木や枯れ草などに水分が凍りついて白い花をつけたようになる現象を意味する。従来の墓参の形ではなく、新たな弔いの形を生み出そうとする過程が、「夏の花」から「氷花」、二つの作品名に表現されている。

## 彙報

第六十七回 原爆文学研究会

○日時 二〇二二年十二月四日(日)

○会場 ウェブ会議システムを利用したオンライン形式での開催

○研究発表

中澤晶子『ワタシゴト14歳のひろしま』を読む

く(アナタ)から(ワタシ)へ

相川 美恵子

○「原爆文学」再読9——原民喜「夏の花」

発題…中野 和典・遠田 憲成

## 編集後記

巻頭エッセイは中谷いずみさんをお願いいたしました。日程に余裕のないなか、ご快諾頂いただけでなく研究の価値を「祈りではなく、まぶたを開くこと」に見出す、時宜にかなった内容のエッセイをどうもありがとうございました。

さて、第二期、二回目の原爆文学研究会は、オンライン会議システムを利用し、オンライン形式での開催でした。クリスマスの時期を避けた開催でしたが、入試準備のために欠席あるいは途中入室される方も多く、この時期の日程調整は難しいな……と痛感した次第です。しかし、出入りの自由度が比較的高く、参加方法も個人で選べるなど、オンライン形式での開催の良さも発揮されたかと思えます。

新型コロナウイルス感染症流行が落ち着いてきたとはとても言えない状況ですので、研究会に安心して参加できる方法を維持するためにも、引き続きハイブリッド形式あるいはオンライン形式での研究会開催となる予定です。ご自身の状況に合わせた参加方法をお取りください。

第二期から世話人会に加わりました。微力ではありますが研究会がより良いものとなるように尽力してまいります。お助けいただくことが多々あるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(樫本 由貴)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四・〇一八〇 福岡市城南区七隈八・一九・一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631

URL <http://www.genbunken.net/>